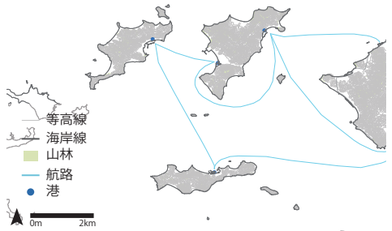
4.5 神和（津和地島・怒和島・二神島）



神和の地形図（1/200,000）
（国土数値情報を用いて作成）

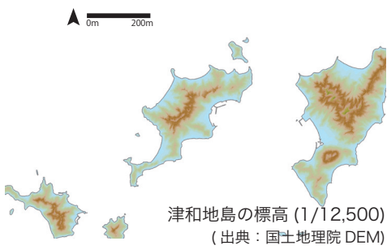
津和地島

津和地島の状況（2015 年現在）

面積：2.85km²
外周距離：22.7km
人口：291 人
世帯数：161 世帯

出典：「平成 27 年国勢調査」
「日本の島へ行こう HP」

津和地島概要図
（国土地理院地図・空中写真閲覧サービス　2019 年（1/24,000）を合成したものをベースに、その他情報を追記）



津和地島の標高（1/12,500）
（出典：国土地理院 DEM）

（1）津和地島の位置付けと構成

愛媛県、山口県、広島県との県境に位置する。周辺の海流は比較的早い。島全体を囲うように崎が存在し、その要所で神社が建てられていた形跡がある。瀬戸内海島有数の寡雨地帯に属しているのに加え、津和地島の地形は急峻で、地表は保水力の小さい花崗岩風化土で覆われているため、河川が未発達で流量が少ない。この問題を解決するべく、2001 年に日本初の貯水兼導水トンネルが建設された。このトンネルの貯水量は 12,000 立方メートルで、島民の 50 日分と言われている。松山市中心部を向いた南東を向いた湾に一つ集落が形成され、背後の旗山はそれなりに標高があり、旗山の北面や南部の崎を除いて耕地が開拓されたいたことが空中写真からわかる。

（2）津和地島の土地利用

1）土地利用の起源

島の西岸竹ノ浦に、広島県蒲刈から六人衆が住みついたのが最初とされ、後に東側の津和地湾に移り三六人衆に地割りされたと伝えられている。瀬戸内研究では山口県の周防大島から来島したという説もあり、どちらが正しいかは断定できないが、いずれの場合も漁業を求めて移住してきたと考えられる。口伝では、最初に六人衆が住み着いた場所は長崎の鼻と言われており、忽那氏が八幡宮を祀った位置とも一致する。広島県蒲刈から竹ノ浦へ来島し、暴風を避けるために長崎の浦へ移住したのではないかとも考えられている。豊臣秀吉が天下統一した天正の頃、伊予国風早郡津和地村となった。

2）瀬戸内海における位置付け

幕府体制の頃より、瀬戸内の交通は頻繁になった。津和地島は下関を経て大阪へ向かう「中乗り」航路の中間地点にあり、幕府の公用船の多くはこの航路を通行していた。津和地島は、北西の強い季節風を避けるための天然の良港であったため、船人たちにとって親しみ深く便利な港であった。

松山藩は接待所であるお茶屋を置き、にぎわいを見せた。集落の東端の新地には遊女屋が五軒あり、1637（寛永 14）年には常燈鼻に常夜灯がともされた。1878（明治 11）年の風早郡地誌では、戸数二七〇戸で大浦（二七一戸）と共に諸島内の最も大きな集落を形成していた。

公用船の中には、朝鮮信使、オランダ使節などがおり、幕府公用船に対しては薪・米の支給や海難救助などの便宜を図ることが義務付けられていた。

3）津和地の生業

【漁業】

第二種兼業漁家率が高く、漁業が農業を補う形で発展してきた。津和地瀬戸（津和地島と怒和島の間）では潮の流れが早く、複雑な潮流によって身の引き締まった魚介類が捕れるため、水揚金額は高い。一本釣りが最も多く、刺し網、船びき網（ローラーゴチ網）などにより漁獲量をあげており、魚種はタイが圧倒的に多い。年中通して漁業が可能。

【農業】

他の島と同様に柑橘栽培が盛んであるが、近年では玉ねぎの栽培に力を入れている。砂地で作る玉ねぎは苦みが少なく甘みが強いのが特徴。低地を活用したものも多いが、緩斜面に石積みで形成された段畑で栽培されているものも多い。

津和地港
（2020.9 撮影）

津和地島と流児島の間の沿岸で養殖が行われている
（2020.9 撮影）

玉ねぎが栽培される緩斜面の段畑
（2020.9 撮影）

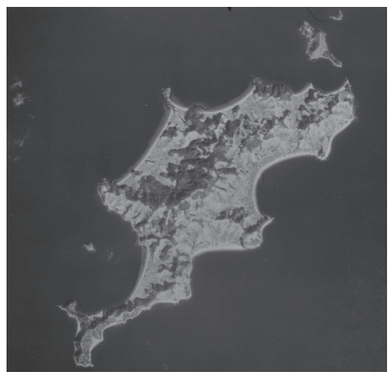
5）土地利用の変遷

集落域は、戦後からほぼ変わらない範囲に留まっている。農地は、柑橘や玉ねぎ等の栽培の全盛期には、島の半分以上が耕作地として利用されていたと推測されるが、1984 年には、その多くが森林化した状況が、空中写真から伺える。現在では、低地や傾斜地の一部で柑橘や玉ねぎの栽培が行われている。農地の土地利用自体に大きな変遷は見られないが、近年は他島から泳いで来たとされる猪などの害獣による農業被害が頻繁に報告されている。津和地島をはじめとした忽那諸島の至る場所で、猪を対象とした罠がいたる所に見られることから、農家の苦労が伺える。

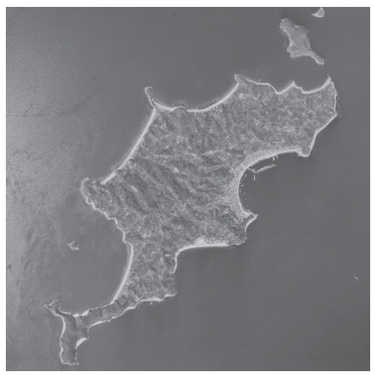
猪対策の罠
（2020.9 撮影）

低地部は畑として利用されているが、後背斜面地のみかん畑に繋がる索道施設が設置されている
（2020.9 撮影）

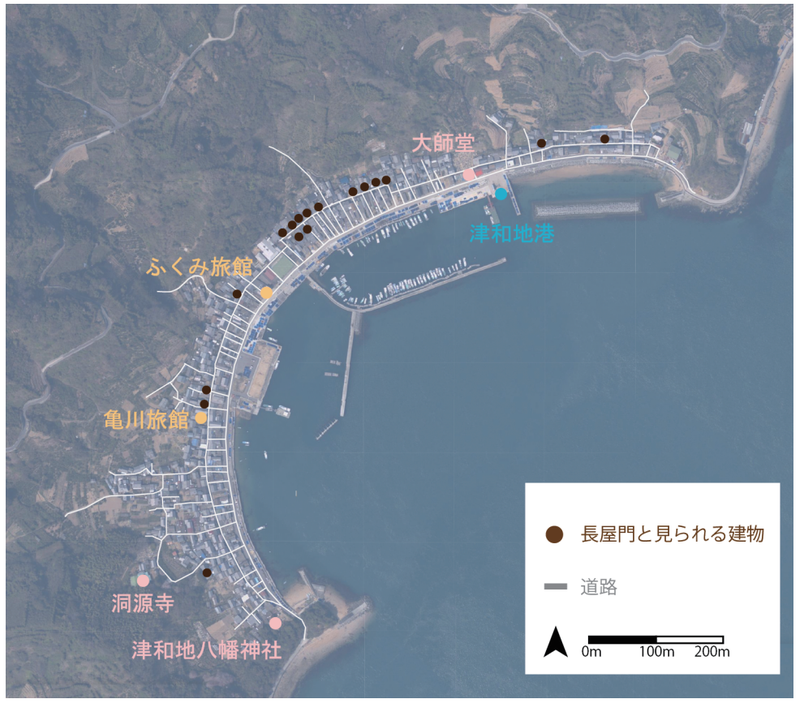
低地と斜面に形成されたアジロ海岸の畑
（2020.9 撮影）



1948 年 空中写真（1/57,000）
（出典：国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス）



1984 年 空中写真（1/57,000）
（出典：国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス）



津和地集落の構造
（国土地理院地図空中写真 2019 年 (1/10,000) を合成したものをベースに、その他情報を追記）

津和地島の遠景
（2020.9 撮影）

津和地集落のまちなみ
（2020.9 撮影）

（3）津和地の集落

1）津和地集落の空間構成

津和地集落は、島の東部約 1000m の湾に広がる島唯一の集落である。海岸沿いと山手側に形成された 2 本の道路が湾と並行に形成されている。宅地はその道路に対して間口の狭い短冊状となっており、宅地の脇に、海岸部から山手側に抜ける細い道が形成されている。

街区の特徴は、湾に並行した二本の道路に挟まれた海手側と山手側の 2 つに区分することができる（後述）。集落の背後には山が迫っており宅地は大きく広がらず、一部谷地に小さく宅地や農地が広がっている程度である。

港は、集落の東よりに位置する。集落の西南端には津和地八幡神社が、西の高地には洞源寺が、東端には常夜燈の跡地が配置されている。

2）海手側の街区

港湾整備により、海岸部に防潮堤と道路が整備されている。この道路に面して、鉄筋コンクリート造で平家及び 2 階建の倉庫兼住居群が数多く立地するのがこの街区の特徴である。二階部分は、海側をバルコニーにした形状が多くみられ、直接海岸道路側からアクセスできるようにしている例もある。津和地島には、原則として男子には宅地・農地を平等分割相続させる風習があり、長方形地割が行なわれていた。海沿いの家屋は、山手側の母屋の納屋として使用されることが多いが、分家する際に譲られて、新宅の母屋として使用されることもあり、また隠居屋として使用されることもあったようである。現在は、建物としては新しいものが多く、当初の納屋的な利用と住居利用が入り混じっているものと思われる。

海岸沿いの風景
（2020.9 撮影）

平家と 2 階建の建物群とその連続
（2020.9 撮影）

2 階に通じる階段の付いた建物
（2020.9 撮影）

番屋風の建物
（2020.9 撮影）

3）山手側の街区

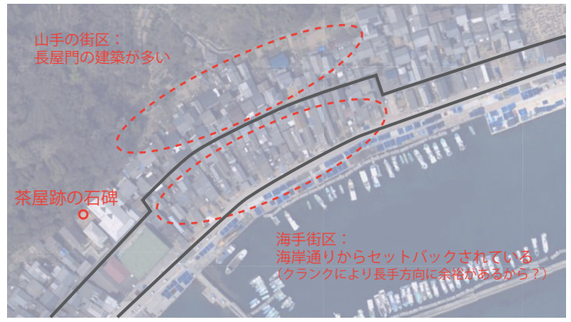
海岸沿いの道路に並行して、山手側にも湾と並行した道路が形成されている。この道路沿いには、表通りとは違い古い木造家屋が多く立地するのが特徴である。山手側、海手側双方の敷地にたつ建物の入口は、この通りに面しており、古くから利用された通りであったことがうかがわれる。建物には朱色に塗られた材を使った例も多く見られる。ファサードの庇には、外壁に垂木を支える独特の持ち送りの金属が装飾されていて、その形状もさまざまであった。土蔵もいくつか残されている。古く繁栄した時代の面影を残している。

4）山手側に窪んだ街区

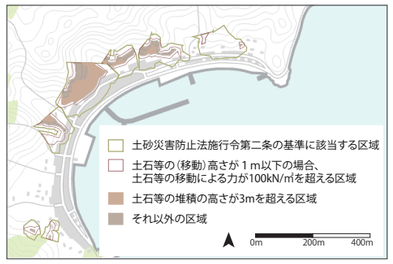
かつて瀬戸内海航路の要衝として、参勤交代に向かう諸大名を接待するための御茶屋が港におかれていた。松山藩主の名代である八原家が常駐し、参勤交代の便宜を図るなどの功績をあげたとされる。JA えひめの選果場の裏手はの茶屋跡地であって（かつて保育所だった）、片隅に碑が建てられている。この近隣の集落中央部は、道路が山側に折れ曲がる構造になっており、また茶屋群であったと思われる手摺や欄間などの装飾に凝った建物が集積している。

5）土砂災害等の警戒区域

御茶屋が集積したと考えられる街区の背後には山が迫っており、この一帯は土砂災害警戒区域に指定されている。周囲に障害物のない島嶼では、夏期になると台風や豪雨による影響を受けやすく、防災整備が間に合っていないため、土砂災害での被害が頻繁に報告されている。



山手側に窪んだ街区
（国土地理院空中写真 2019 年 (1/4,000) をベースに、その他情報を追記）



県指定の土砂災害警戒区域
（「愛媛県土砂災害警戒区域の指定の工事に係る」を参考に作成）

山手の通り
（2020.9 撮影）

山手の通り立地する建物
（2020.9 撮影）

旧道沿いにいくつか立地する土蔵の崩れた外壁をとたんで塞いでいる
（2020.9 撮影）

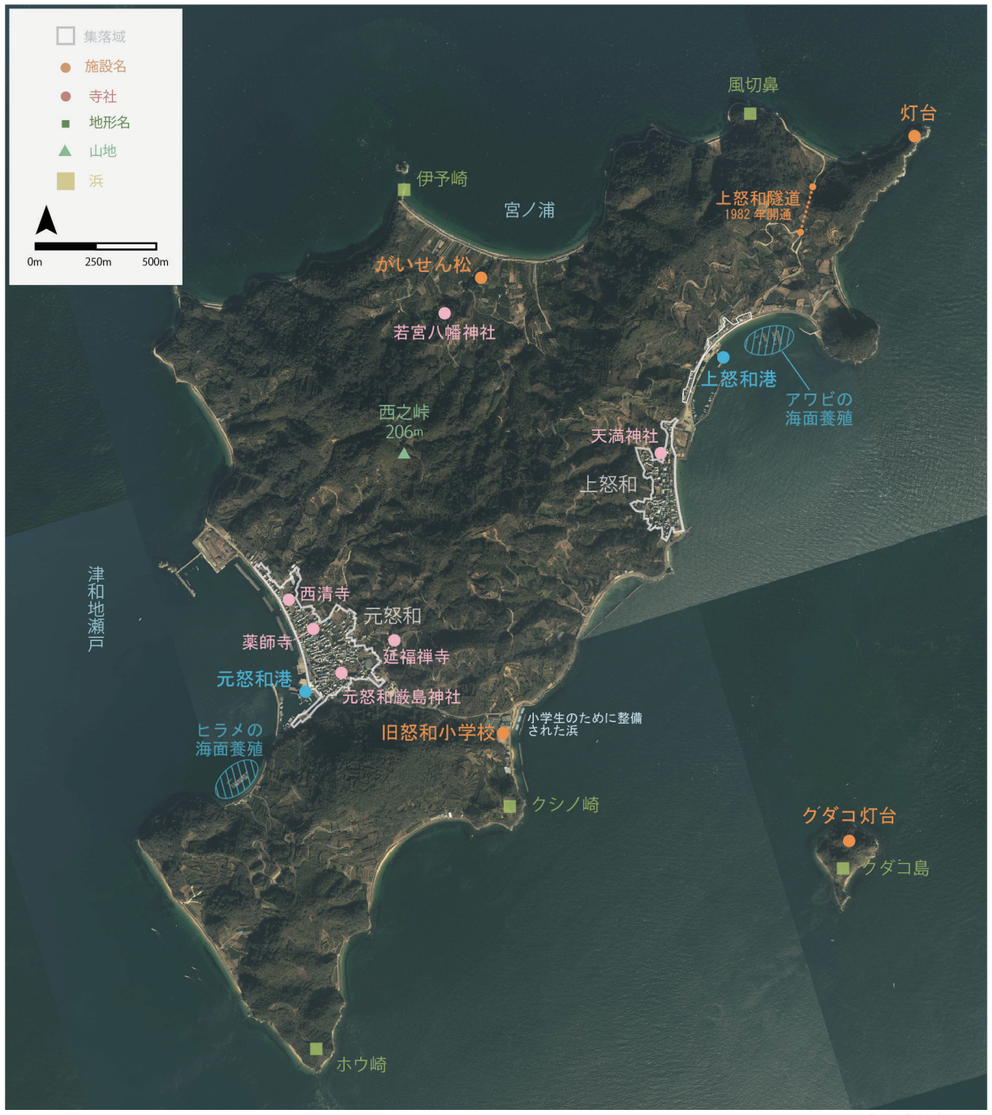
山手の通り立地する長屋門
（2020.9 撮影）

お茶屋敷跡の石碑
（2020.9 撮影）

セットバックした海岸沿いの建物群
（2020.9 撮影）

庇の垂木を支える持ち送りと金物
（2020.9 撮影）

怒和島



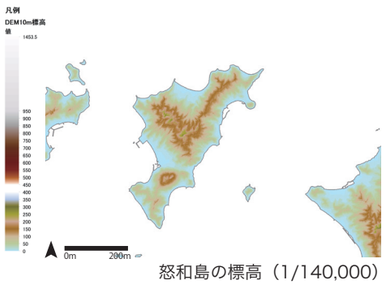
怒和島の概要図
（国土地理院地図・空中写真閲覧サービス　2019 年（1/25,000）を合成したものをベースに、その他情報を追記）

怒和島の現状
(2015 年現在)

面積：4.75km²
外周距離：13.5km
人口：354 人
世帯数：181 世帯

出典：
「平成 27 年国勢調査」
「日本の島へ行こう HP」

（1）怒和島の位置付けと構成



怒和島の標高（1/140,000）
（出典：国土地理院 DEM）

中島の西部に位置する。中島、興居島に次いで３番目に大きな島嶼である。流れの速い海流に囲まれていることから、古くから遭難の事故があったことが伝えられている。同時にその海流により、豊富な魚介が取れる漁場として忽那諸島各地の漁師が漁業を行う地域である。

島内には 2 つの集落が形成され、島東側の湾には上怒和が、西側の湾には元怒和が立地する。それぞれの湾には、養殖場が設置される。島の北にも大きな湾と低地があり、集落が一時期形成されていたようだが、現在は広い農地として活用されてきており、神社も立地する。西之峠は、標高 206m と神和三島の中で最も高い。

（2）怒和島の土地利用

1）土地利用の起源

怒和島は、広島県の倉橋島から来た 20 人によって島北側の宮浦から開発されたが、北西風が強いためそこから移り、現在の二村で分かれて集落を形成したとされる。上怒和の溝田家文書には、慶長年間（1596）以後島尻村（元怒和）、桑名村（上怒和）とあり、前者は 13 戸、後者は 7 戸から始まり、同時分村移住の集落であった。事実上分村していたのに、公文書扱いは怒和一村であったので年貢のふりわけ（元怒和六、上怒和四）や、八幡神社などを巡りしばしば争いがあったといわれている。

2）怒和島の生業

【漁業】

上怒和は元怒和と比べて、世帯数は約半分だが漁業世帯数は約 2 倍ほど、漁獲金額は約 4 倍である。クダコ島付近にはよい礁があり、漁業活動は盛んで、漁獲金額は津和地と共に最上位にある。ローラーゴチ網、刺し網が数隻あるが、中心は一本釣りやあなごはえなわ、たこなわである。魚種はたいが過半を占め、他にめばる・たこ・あわびがこれに続いている。

【農業】

島人の多くは農業を営みつつ漁業権を持っている。愛媛県からの派遣実習生としてアメリカ研修を行った農業後継者が農業の担い手に含まれるなど、全国・海外へと視野を広げる気風がある。砂地の土地と気候を活かした玉ねぎ栽培も増えてきている。

3）クダコ島

複雑な潮流による有数の漁場としての釣人の人気スポット。かつて忽那水軍が勢力を誇っていた平安後期に拠点の 1 つである。怒和島と中島との間の潮の流れが速く危険な海域に築かれた城郭のクダコ島には、明治 36 年に灯台が建てられ現在も航海の安全を守り続けている。

集落から離れた位置にある若宮八幡神社
（2020.9 撮影）

玉ねぎと柑橘の畑が島に広がる
（2020.9 撮影）

1982 年開通した上怒和隧道
（2020.9 撮影）

丸子鼻付近でアワビの養殖が行われている
（2020.9 撮影）

中島と怒和島との間に浮かぶクダコ島
（2020.9 撮影）

柑橘類を船に積み込むためのクレーン
（2020.9 撮影）

上怒和漁港の巨大な浮き桟橋
（2020.9 撮影）

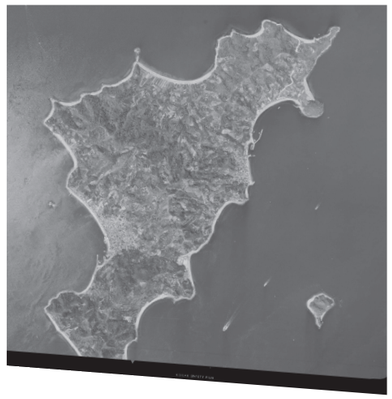
小学生のために整備された浜
（2020.9 撮影）

4）土地利用の変遷

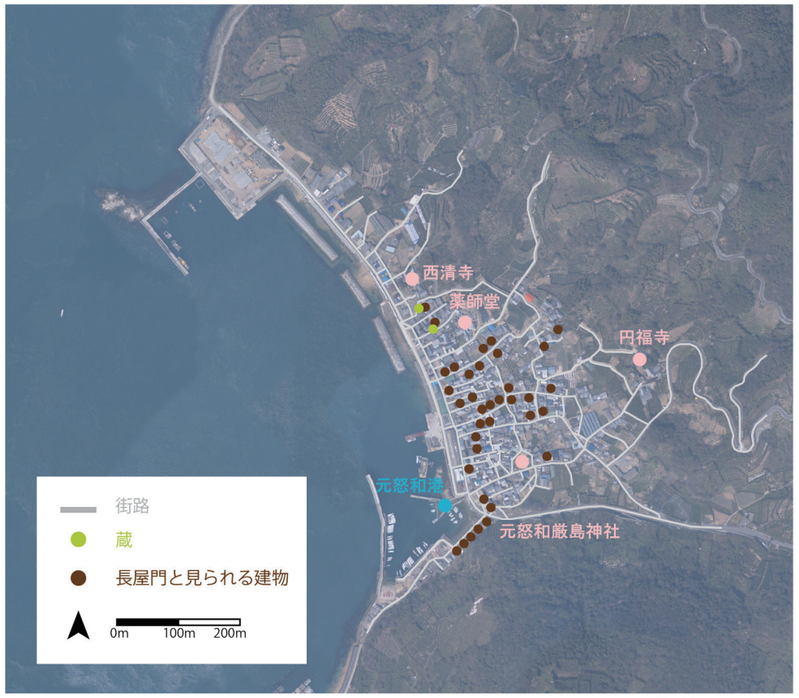
集落域は、戦後からほぼ変わらない範囲に留まっている。

農地は、柑橘や玉ねぎ等の栽培の全盛期には、島の半分以上が耕作地として利用されていたと推測されるが、1984 年には、その多くが森林化した状況が、空中写真から伺える。現在では、低地や傾斜地の一部で柑橘や玉ねぎの栽培が行われている。

1948 年空中写真（1/60,000）
（出典：国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス）



1984 年空中写真（1/60,000）
（出典：国土地理院　地図・空中写真閲覧サービス）



元怒和集落の構造
（国土地理院地図空中写真　2019 年 (1/10,000) をベースにその他情報を追加）

元怒和のまちなみ
（2020.9 撮影）

海岸沿いの倉庫群
（2020.9 撮影）

切妻屋根の倉庫
（2020.9 撮影）

山手の路地の様子
（2020.9 撮影）

山裾側の入り組んだ道と古い家屋
（2020.9 撮影）

（3）元怒和の集落

1）元怒和集落の空間構成

元怒和は、怒和島の西部に位置する集落である。比較的傾斜の緩い低地が多く、集落は海岸沿いから山裾に広がり、集落背後には農地が形成されている。

街区は、海岸沿いと山手側に湾に並行した 2 本の道路と、そこから宅地の広がる山裾に向けて直行した道路により構成される。

2）港湾整備と海岸部の街区

かつて元怒和の船着場は集落南端の区画に立地していたが、戦後に現在の港湾や護岸が一体的に整備された。元怒和港の防波堤の水深は 30.4m で、完成当時は東北地方の気仙沼港を抜いて全国一の深さであった。

新設された海岸沿いの道路は、軽トラックが二台通れるほどの幅員があり、この道路に面した海岸部の街区には、他島に比べ規模の大きな切妻屋根の倉庫群が並んでいる。漁業の作業用倉庫や元怒和の果実を出荷するための選果場、集会所などに使われていると考えられる。

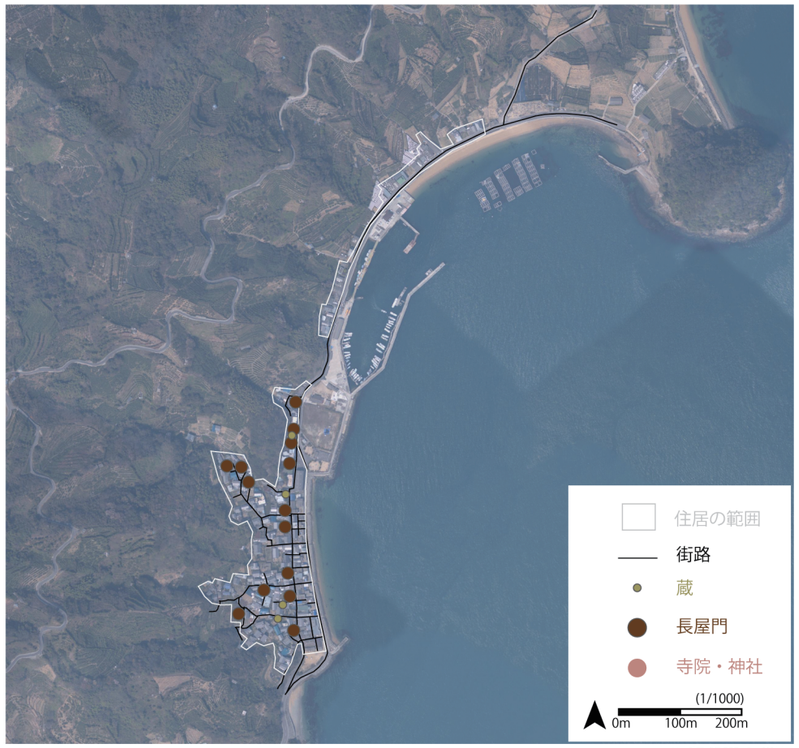
3）旧主要道の建築物

海岸沿いの道路から一本山手に入った旧主要道沿い、またどちらかといえば山手に向けた細い道沿いに多く、長屋門などの古い家屋が集積している。白い土壁が特徴的な土倉や住居の隙間に畑も多くみられ、他村よりも比較的低地が広く、住宅の敷地が十分確保されていたと考えられる。ただし、傾斜地が迫った部分もあり、2018 年西日本豪雨による土砂災害の被害を受けた家屋もある。また集落には所々に、RC 造 2~3 建ての建物もみられる。

5）集落の農地

集落の立地する湾は、海岸部から山手にかけて比較的ゆるく段階的な勾配となっており、集落背後は一面に農地が形成されている。傾斜のゆるい低地、集落の合間やその背後では野菜など、さらに山手側の急勾配の土地には果樹が栽培されている。

集落背後の農地と水路
（2020.9 撮影）



上怒和集落の構造
（国土地理院地図空中写真　2019 年 (1/10,000) をベースにその他情報を追加）

上怒和のまちなみ
（2020.9 撮影）

海岸沿いの道路と RC 造の倉庫群
（2020.9 撮影）

RC 造キューブ状の倉庫
（2020.9 撮影）

山手側の通りと基礎の高い住居
（2020.9 撮影）

山手の通り沿いの門
（2020.9 撮影）

（4）上怒和の集落

1）空間構成

上怒和は、怒和島の東部に位置する集落である。港は、集落の北に位置する。地形条件的にも元怒和ほど集落の広がりは見られない。街区は、海岸沿いの道路と山手側の道との間に一区画、山手側の道の山側に、入り組んだ低地部を使って少し広く宅地が形成される。集落の背後には山が迫っており、傾斜のゆるい場所には農地が形成され、地形（傾斜）に対応する形で折れ曲り複雑な道が形成されている。

2）海岸沿いの新設街区

かつては集落の北側の丸小鼻付近に港湾が置かれていた。潮位差の大きい上怒和では、昭和後期の港湾整備で多大な費用が費やされ、現在の巨大な浮桟橋が建設された。

海岸沿いには、RC 造 1~3 階建ての簡易なキューブ状の建物が並ぶ。漁業や農業用の倉庫と考えられ、入口は海に向かってではなく、建物間に形成された、海から山手方向に向けた道に向いている。海からの潮風や台風による強風から背後の古い建物を守る役割を担っているようにも思われる。

3）山手側の道路沿いの街区

伝統的な長屋門や切り妻屋根の木造住宅が所々に残されている。その多くは自然石の石積み基礎により 60cm ほど 1 階床レベルを底上げし、玄関前に 3 段ほどの階段を設置しているのが特徴である。

このさらに山手側は海岸部の直線的な道とは対象的に、背後の山の地形に沿って入り組んだ勾配のきつい道が形成され、傾斜地に石積みの擁壁を形成して立つ住居や山林に向かう道が形成されている。木造の門や蔵を持つ屋敷が連なっており、古い時代の街並みが部分的に残されている。一方で、RC 造など比較的新しい住宅もみられる。

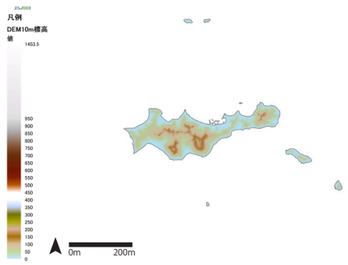
4）集落の農地

上怒和集落の背後の傾斜地には農地が形成され、地形に沿った農道が整備されている。また、かつて村があったとされる北西部の宮浦地区は、集落周辺部よりも広い低地が広がっていて、果樹園や畑として利用されている。

集落北部の農地
（2020.9 撮影）

二神島

二神島の概要図
（国土地理院地図・空中写真閲覧サービス 2019 年 (1/25,000) を合成したものをベースに、その他情報を追記）



二神島の標高 (1/160,000)
（出典：国土地理院 DEM10m）

二神島の現状 (2015 年現在)

面積：2.15km²
外周距離：9.9km
人口：127 人
世帯数：80 世帯

出典：「平成 27 年国勢調査」、「日本の島へ行こう HP」

（1）二神島の位置付けと構成

神和地区 3 島の南端の島嶼であり、東に中島・興居島、南に由利島、西に屋代島が位置する。東西に長細く、忽那諸島では野忽那島に次いで 4 番目に小さく、神和 3 島の中では一番小さい島であるが、米山や妙見山など、比較的標高の高い山を持っているのが特徴である。手付かずの自然環境や独自の文化は、忽那諸島の中でも特殊な島の風景を生んでいる。

集落は北の津和地島・怒和島に向かって立地し、標高の高い山地部を除いて島全域に農地が形成されていた。

遠景から見た二神島
（2020.9 撮影）

二神島から見た津和地島、怒和島
（2020.9 撮影）

妙見山
（2020.9 撮影）

（2）二神島の土地利用

1）二神島の起源

二神島には円錐形をした 2 つの山に神が祀られており、この山が船人の目印になる所から、「二神山」と呼ばれたのではないかと言われている。二神氏は、南北朝末期に山口県の長門国豊田郡の豪族の一流が二神島へ移住し、二神氏を名乗ったのが起源とされる。一時期は松島といった時代もあった。1479（文明 10）年、二神氏は湯築城を拠点とする河野氏の命に従って忽那氏・重見氏と協力し他国からの防衛にあたり、河野氏直轄領の代官を努めるようになった。こうして、二神氏は二神島を本拠とし、「二神島作職」を相伝しながら、粟井郡反役職、河野郷役職に補任され、河野氏の軍事力の一翼を担った。応仁の乱を経て戦国期に入ると、1505（永正 2）年勢力が陰り始めた忽那氏に代わり、二神氏は忽那諸島にも、勢力を伸ばし始めた。

2）由利島との関係

二神島の南方には、現在は無人島の由利島がある。二神島で暮らしに困って生活が立ちゆかなくなると、老人や子どもを二神島に残し、由利島に夫婦で移り住み、野菜を作り、生計を立てて借金を返済するという位置付けの島であった。二神島より味の良い野菜や芋がとれたためだという。

3）自然

島内には県の天然記念物に指定された「ビャクシン自生地」や、樹齢 130 年も越える高さ 5mにも及ぶ「大サボテン」など、希少な自然風景が見られ、瀬戸内では少ない丸石の浜「アラレガ浜」がある。1972（昭和 47）年には、「近代化されず、日本古来の美しさを多く残したパラダイスの島」として地理雑誌「ナショナル・ジオグラフィックマガジン」に掲載された。

4）二神島の生業

【漁業】

二神地区が、領分の好漁場である由利島漁域への入漁を他地区にも認めているため、自己労力によらない入漁料収入が二神の年間漁獲高の約 15% に及んでいる。刺し網が最も多く、一本釣り、船びき網、が次いでいる。たこつぼの好漁場で、20 業体が出漁している。かつては船で 1000~3000 個のたこつぼを入れるが、底引網漁船が入漁し、トラブルもあるので今はそれ程の数は入れていないといわれる。

【農業】

明治以前の二神島の農業は、川が少なく、傾斜地が多くとても厳しかったといわれる。当時栽培されていた米、麦、粟、きびなどを合わせても一年分の食料には到底足りず、生活は窮困していた。明治時代以降は、さつまいもや生姜、みかんなどの栽培によって昭和中期には島全体に農地を拡大した。現在では、漁業と兼業してみかん、さつまいも、枝豆などの栽培が行われている。

5）造船所跡

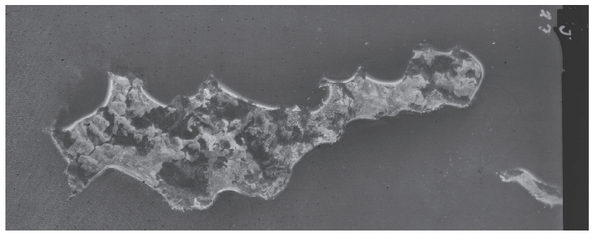
二神島にはいくつか造船所があった。二神集落の西にあるイナ グラという場所で豊田茂七らが始めた豊田造船所は、第二次世界大戦から昭和 50 年頃まで稼働していたという。元々は集落中央にある向井地区 の海岸線で小さい船を作っていたが、大型の帆船を作るようになってイナグラへ移動したとされる。造船所の敷地は、当時の国勢調査か ら 300 坪ほどあったと考えられる。戦時中は、海軍からの仕事を請け負って、木造の上陸用船艇などを造船していたらしい。材は九州の松と杉が主で、二神島のすぐ西の山口県の屋代島の対岸にある大畠の木材店から仕入れていたといわれる。受注先は主に広島県倉橋島が多く、長崎県壱岐島、兵庫県家島諸島の船も造船した。

6）土地利用の変遷

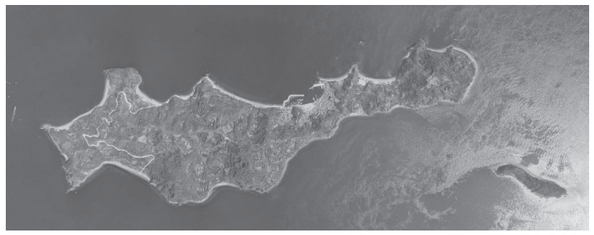
二神島の集域や民家の規模は、約 100 年前から大きな変化はない。ただ人口は 1/10 にまで減少しており、空き家が大半を占めている。1948 年の航空写真から見ると、半漁半農の文化を歩んだ二神島はかつては斜面一面が畑として拓かれていたことがわかる。1984 年には西部に農道が整備され、険しい山間での農業の利便性は向上したが、そうした農地のほとんどは現在では放棄され、山林になって緑に覆われている。

島の西部に整備された農道
（2020.9 撮影）

農業と生活を支える、島唯一の溜池
（2020.9 撮影）



1948 年　空中写真（1/50,000）
（出典：国土地理院地図・空中写真閲覧サービス）



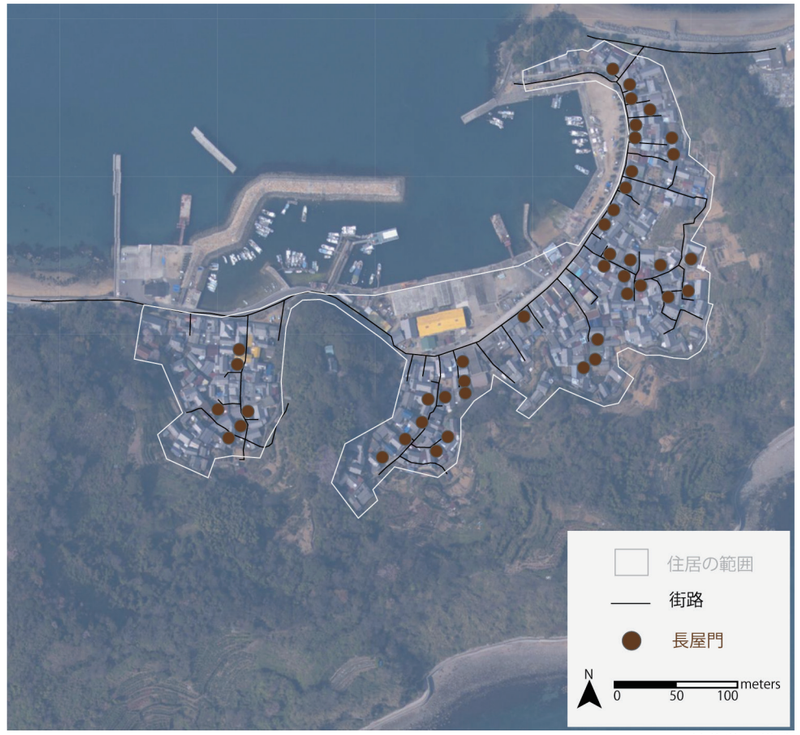
1984 年　空中写真（1/50,000）
（出典：国土地理院地図・空中写真閲覧サービス）

二神集落のまちなみ
（2020.9 撮影）

（3）二神の集落

1）二神集落の立地と空間構成

二神集落は、二神島の北部に位置する集落である。北向きの湾に面し、山手の複雑な地形に沿って宅地が広がり集落を形成している。集落は二神宇佐八幡神社のある小山を挟んで 2 つの地区に分けられている。海岸沿いの道路と、そこから山手に向かって形成された曲がりくねった道がそれぞれの住戸群へのアクセス道として機能している。この道は山に突き当たり、その多くは袋小路になっている。集落の背後にはすぐ山が迫っていて、斜面に農地が形成されている



二神集落の構造
（国土地理院地図空中写真（20019 年、1/5,000）にその他情報を追加）

2）海岸沿いの街区

海岸部は港湾整備が行われており、道路も整備されている。道路沿いには、他島と同様に間口の狭い短冊場の街区もあれば、間口を広くとった建物もみられる。間口の広い街区においては、木造総二階建ての番屋風の建物が多く見受けられる。

海岸沿いの道
（2020.9 撮影）

海岸沿いの建物
（2020.9 撮影）

3）山手の街区

海岸沿いの道から山手に向かった道に入ると、道幅は 1m 程度で狭く、奥に進むと地形に沿って分岐するなどし、入り組んだ迷路のような空間が形成されている。その道沿い、斜面地に住戸が隙間なく建てられている。長屋門などの古い様式の家屋が残されている。二神島は猪の出没が特に顕著で、門には動物除けの金網が設置されている。

山手の路地沿いに立地する長屋門
（2020.9 撮影）

集落内部の細い路地
（2020.9 撮影）

4）墓地

二神島には集落の東西それぞれに墓地がある。これは古くから葬式中に寺社を横切ってはならないという風習があったためといわれ、集落のどこに暮らしていてもよいように考えられた配置になったとされる。

5）神社

二神島には、古くからの伝統やしきたりが色濃く残っている。集落の中心の高台からは、約 900 年前に建立された宇佐八幡宮が集落を見下ろす。この神社では、船上で梵天を持った少年たちが伊勢音頭に合わせて踊る舟踊りが以前まで行われてきた。現在でも全国的に珍しいおみどり神事が行われ、伝統を継承している。集落から離れた妙見山は霊山として崇められており、現在でも女人禁制の風潮が残っていると言われており、そこで祀られている妙見神社は、豊年豊漁を授かる神として古くから二神島の漁業を見守る。

妙見神社
（里島めぐり HP）

集落東側の墓地
（2020.9 撮影）

安養寺
（2020.9 撮影）

宇佐八幡宮への参道
（2020.9 撮影）